

科目区分：中等教育コース（音楽教育）

授業科目名：音楽理論・作曲法（編曲法を含む）／音楽デザイン基礎(1) (2) ／音楽デザイン(1) (2)

音楽デザイン領域科目における授業形態とICT活用の効果

音楽教育講座 井上 洋一

1 授業の概要

(1) 音楽デザイン領域のカリキュラム

本学の音楽デザイン領域科目は、免許法に基づく科目区分上、音楽理論・作曲法に含まれている。音楽デザイン領域科目は、小・中・高等学校の学習指導要領（音楽）で示された「表現」領域に含まれる「創作」（小学校では「音楽づくり」）の活動に対応しており、履修者の作・編曲の技能向上だけでなく、創作活動の指導者としてのスキルの上りも目的としている。

(2) 授業評価の対象科目と受講者数

音楽デザイン科目は学年進行に沿って、以下の順で配置されている。なお、数字は今年度の履修登録者数である。

- ① 音楽理論・作曲法(編曲法を含む)… 1年前期 15
- ② 音楽デザイン基礎 (1) … 1年後期 7
- ③ 音楽デザイン基礎 (2) … 2年前期 5
- ④ 音楽デザイン (1) … 2～4年後期 8
- ⑤ 音楽デザイン (2) … 3・4年前期 4

音楽理論・作曲法（編曲法を含む）は、音楽を指導する者にとって必要不可欠な楽典や作曲及び編曲の基礎理論を習得することを目的としており、中学校・高等学校（音楽）の教員免許取得のための必修科目である。また、音楽デザイン（1）（2）は、より専門的な音楽創作を行い、作品発表による卒業研究に備えるために重複履修可としている。

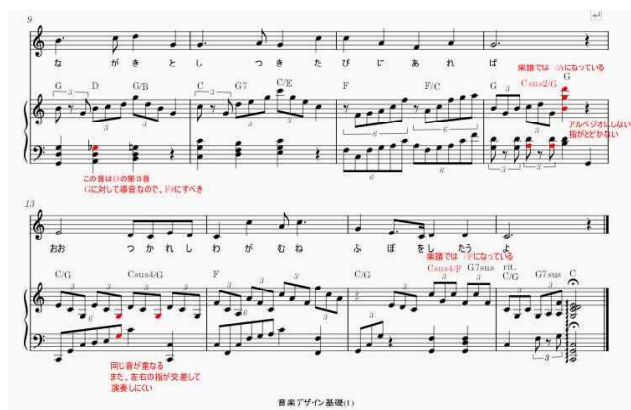
2 授業評価・研究の内容

昨年度から波長引くコロナ禍において、本学でもBCPに応じた授業実施方針が示され、その都度、可能な限りの教育効果を求めて授業形態を変更してきた。以下、今年度実施した授業形態とICTの活用について列挙する。

(1) 非同期型遠隔授業

音楽専門科目は、演習中心の授業が多く、対面での遠隔授業には不向きである。特に、遠隔授業では、音の伝達に時間的な遅延が生じるため、複数人が同時に演奏することは極めて難しい*1。

しかし、音楽デザイン領域科目では、作品創作の過程は個の活動が中心であり、1対1型の個別添削は非同期型遠隔授業でも実施可能な部分は多い。Moodleから楽譜データを提出させ、教員がエディットしてフィードバックすることにより、履修者は楽譜と音で添削された部分を確認することができる（写真①）。



写真① MuseScoreを使った課題添削

(2) 同期型遠隔授業

昨年からは、楽譜作成アプリを「MuseScore」*2に統一している。Zoomを使った同期型遠隔授業では、アプリの操作方法や作編曲の理論的な説明を一斉に画面共有して示すことができる。また、提出された作品を他の履修者とともに鑑賞し、相互に評価し合ったり、音楽デザイン(1)では、学生が編曲した伴奏に合わせて、各自が主旋律を歌ったり演奏したりする「1対多」のアンサンブルを行うことができた。

*1 インターネットを介したオーディオデータの双方向送受信の遅れを極小化し、遠隔地間でも違和感のほとんど生じないアンサンブルが実現したオンラインの無料サービスも登場している。https://www.yamaha.com/ja/news_release/2021/21062901/

*2 無料の楽譜作成ソフトウェアである。Windows, Mac, Linuxに対応しており、学生の所持するパソコンのOSを問わない。直感的な操作で分かりやすく、初心者でもきれいな楽譜を作成することが可能である。<https://musescore.org/ja>

(3) 対面型授業

第4Qの前半は、対面授業が基本となった。対面授業においても、作品添削は音楽アプリのデータを介し、共有は大型モニターを用いるなどICT機器は欠かせなかった。音楽デザイン基礎(1)では、改修工事後に新設した芸術系教員養成演習室(ML室)の電子ピアノを用いた合奏を行った。音楽デザイン(1)は、割り当てた時間に学生が教員研究室を訪れて1対1で行う個別添削の授業が大半であるが、ミラーリングアプリを用いて研究室内のテレビ画面に教員のパソコン画面をミラーリングして、教員と学生とのソーシャルディスタンスを確保した*3。また、Zoomで添削の様子を同時配信することによって、学生が待ち時間にスマホで聴講したり、登学を控えている学生が授業に出席することができた。1月以降、感染の急拡大によって、計画していた対面での作品発表会は断念したが、Moodle上でPDFの楽譜集を共有し、オンライン上で作品発表会を行った(写真②)。

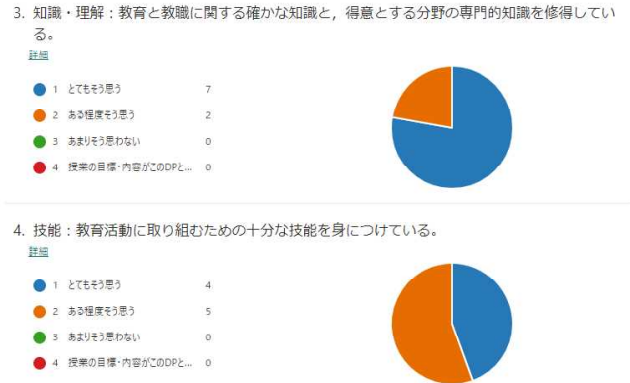


写真② オンライン作品発表会

3 成果と課題

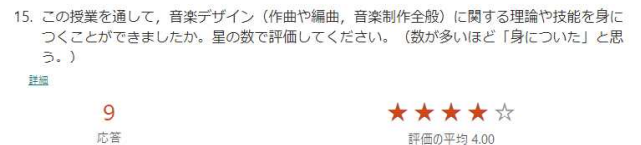
昨年度、1年前期の音楽理論・作曲法(編曲法)において、初回のレディネステストと最終回の試験のスコアを比較し、最低点が上がり、標準偏差が小さくなったことから、遠隔授業(昨年度前期は、ほぼ同期型遠隔授業)におけるICT活用の効果として、知識・技能面の個人差は縮小し、全体の底上げができたことを報告した。

今年度は、BCPが引き上げられた期間、授業実施方針に従って遠隔授業は非同期型を基本とすることが多く、昨年のデータと単純に比較することはできない。そこで、今年度の後期DP調査の結果から、成果と課題を考察する。



グラフ①②: 知識・理解, 技能

すべての回答者が知識・理解, 技能を身に付けていると回答した。前期DP調査と比較しても「1 とても思う」の割合が非常に高い。ただし、前期の音楽理論・作曲法(編曲法を含む)は必修科目のため全員が履修するが、音楽デザイン基礎(1)以降の科目は、自由科目であるため、履修者の創作に対する興味・関心、意欲も異なっている。より本格的な作・編曲に取り組む音楽デザイン(1)(2)の重複履修者は、創作意欲旺盛で高度な知識・技能も、もともと身に付けているため、授業の成果とは明言できない。しかし、授業者が設定した「この授業を通して音楽デザインに関する理論や技能を身に付けることができたか」の質問に対して、平均で5段階中4の評価であった。



さらに追加の質問で、具体的に身に付いたことを尋ねたところ、次のような回答があった。これらは、創作指導においても、基本的な理論や知識であり、将来、音楽科教員として、創作や音楽づくりの指導場面で、即、役立つものである。

*3 コンピュータの画面をAppleTVや同等のプログラムを実行しているデバイスに送信できるアプリは各種ある。ここでは、AirParrot3を用いた。https://www.airquirrels.com/airparrot/

- 様々な楽曲の構成に対して興味が高まったとともに自分自身で分析できるようになった。
- 次に来る音、流れなどを考える力、編曲への意欲。
- 変奏に使える様々な技法
- 自分の作りたい音楽や表現したい響きを、コード進行や和声の法則をもとに、具体的に音にすることができた。
- 和音の使い方
- 作曲の基本的な知識が身についた。
- コードを理解した上で伴奏を行う技術
- 和声の構成、伴奏形
- 伴奏のパターンや、編曲する上での注意事項

また、ICT活用の効果を確認するための質問を追加し、次の評価を得た。

17. この授業では、MuseScoreやGarageBandなどの音楽アプリを用いて課題や作品制作を行いました。これら音楽アプリは、役に立ちましたか。（星の数が多いほど「役にたった」と思う。）

詳細

9

応答



評価の平均 4.44

さらに、音楽アプリが具体的に役立ったことをきいた。

- 思い浮かべたが吐嗟に楽器で演奏できない時に、実際どのように聞こえるか確認できたこと。
- 楽譜制作の機会は今後あるだろうから、そのため、様々なアイデアを身に付けられた。
- 楽譜の打ち込みがスムーズで作業がしやすかった。
- MuseScoreは非常に使いやすいソフトで、作りたい音楽を簡単に楽譜におこすことができた。
- 手書きよりも便利な点と実際に音が鳴らせる点
- MuseScoreで音を聴きながら作曲できたこと。
- 独自で曲の編曲や作曲したものを楽譜にしたり、パソコンで保存できて何度でも音を再生することができること。
- MuseScoreは、自分が作成したものを再生できるため自分自身で確認しながら課題を行うことができた。
- 授業の課題制作だけでなく、ほかの場面で使うことができている。

ギガスクール構想が本格化し、各教科でICT活用の実践が求められている中、音楽アプリを使いこなせるかどうかは、音楽科教員のICTリテラシーの重要な要素と言える。

また、下線のように、この授業で身に付けたスキルを授業以外の場面で役立てている学生がいることは授業者としてうれしい。今年度も音楽デザイン（1）の履修者のうち3名が、愛媛作曲協議会主催の作曲作品展（自作曲による演奏会）にエントリーし発表した（写真③）。



写真③ 愛媛作曲協議会作品展2022での発表

授業の感想や要望として次の回答があった。

課題を提出することで、実践的な力が少しずつついた気がしました。添削も意図を汲んでいただきながら丁寧に見て頂けて良かったです。Moodle上には様々な情報を載せて頂いて、いろいろなことを知ることができました。授業内容の後半は少し難しかったので、お忙しいとは思いますが、解説動画などがあるとありがたかったなと思いました。

対面授業や同期型遠隔授業では、顔を見ながらその場で履修者の意図を汲んだ作品添削ができる。しかし、後期後半、感染が拡大して非同期型遠隔授業が増えたため、個に応じた解説動画の作成は時間的に難しく、あまり提供できなかった。教材や資料の準備、指導の効率を考えれば、同期型遠隔授業が望まれるのであるが、コロナ禍がさらに長引き、非同期遠隔授業しかできない場合に備え、対面授業や非同期遠隔授業も動画として記録し、参考資料として活用することも検討したい。